読書に関するエッセー入賞作品集 2024

「何度だって読みたい本！」

または、あなたの読書法・読書論について

小学生の部
最優秀賞

ことばを知る楽しみ

桜台小学校　二年
谷口　楓真

ぼくには何度もくりかえし読んでいる本があります。でも実は、ほとんど毎日読んでいるのに、まだ読んでいないページがたくさんあります。

それは国語辞典です。ぼくはいつも『三省堂　例解小学国語辞典』を読んでいます。

この本は小学校入学の時にプレゼントでもらいました。初めてさわった時は、ぶあつくて重くてむずかしそうな本だなぁと思いました。

さいしょのうちはべんきょうで出てきたことばをしらべたりして、じしょの引きかたをれんしゅうしていました。今ではじしょを読むことじたいが楽しくなってきて、本を読みたい時に国語辞典を読んでいます。

読みかたはいつもパラパラめくって気になったところから読みはじめます。おもしろいことばを見つけると、ぼくがいみのところを読み、お母さんやお父さんにことばをあててもらうクイズをします。はじめて見るむずかしそうなかん字をまねして書くのも楽しいです。

ぼくは国語辞典でことわざをたくさん見つけました。そうぞうするとおもしろいものやなるほどと思うことばがたくさんありました。にちじょうで聞いたことのあることばがことわざであったこともわかりました。

どうぶつもたくさんしらべています。さいきんは、マンガに出てきて気になった「イリオモテヤマネコ」をしらべました。それではじめて西表島という島を知りました。都道府県には小さな島がまわりにたくさんあったと気がついたときおどろきました。それに、特別天然記念物といわれる生きものがいると知りました。だから天然記念物についてもしらべてみました。イリオモテヤマネコということばをしらべてみただけで、たくさんのことを学びました。

国語辞典を読むと、新しいことばやいみを知られてワクワクします。もくてきのことばをしらべているとちゅうで、たまたまめくったページに気になったことばを見つけられるのも一石二鳥でいいなと思います。

人と話す時に、新しく知ったことばで話せると、少し大人になったきぶんでうれしくなります。しりとりの時に思いつくことばがふえて、有利になったのも国語辞典のおかげです。

この国語辞典に書かれていることばをすべて読みおえるのはいつになるのだろう。一ど読んでもわすれてしまうことばもたくさんあります。だからぼくはこれからも何ども国語辞典を読んでたくさんのことばをみにつけたいです。ことばを知ることが、ぼくの楽しみです。

『三省堂例解小学国語辞典　第五版』（田近洵一／編、三省堂、二〇一一）

小学生の部
優秀賞

私は、魔法使い。

暁小学校　五年
中村　椎南

私と、このハリー・ポッターの運命の出会いは、小学三年生のころです。仲良しだった友達がこの本を読んでいて、表紙がみ力的だったので図書室で借りて読んでみました。するとまたたく間に、まほうがくり広げられるこの世界に、そしてハリー・ポッターとロン、ハーマイオニー達がくり広げる日常にハマってしまい、自分もまほう使いになった様な気分になりました。それからハリー・ポッターの本を全かん自分で買いました。読めば読むほどのめりこんでいき、つえはもちろん、ローブ、ネクタイ、マフラー、タイムターナーなどのグッズや小物も集める様になりました。

今ではもう、ハリー・ポッターの大ファンです。ハリー・ポッターと出会わせてくれた友達にずっと感謝しています。

私が一番心に残ったのは最後の最後のシーンです。ハリー対悪のまほう使いの戦いの場面。ハリー・ポッターは悪のまほう使いにころされる運命だったことを知ります。もちろん、殺されたくない。死ぬのはイヤだ！でも自分がにげたら周りが殺される！それはもっとイヤだ！そんな想いとかくとうし、ハリーが選んだのは自らの死でした。

私ならきっとにげてしまいます。でもハリーは勇気を出して自ら死を選びました。私はこのハリーの選たくに心を打たれ、

本を読んでいる時思わず「ハリー、死なないで」とさけびそうになりました。でも、ハリーは死にませんでした。まほうのおかげで死をまぬがれたのです。そして、悪のまほう使いと戦いついに勝つことが出来ました！「ヤッター」と思いきり声をあげました。

この本を通して学べることはたくさんあります。友情。恋愛。他国の文化など。でも一番は、「生きること」です。生きていることの喜びをかみしめて、私は生きるようになりました。ハリー・ポッターのまほう使いの世界、ぜひハマってほしいです。

私は、いつも長へん小説を読む時、「絶対にこう読む」という『本読みルール』があります。まず、一気に飛ばし読みし、大体の内容を頭に入れます。その後、日を改めてゆっくり、そしてじっくり読みこむという読み方です。こうすることで本の中身をしっかり理解することが出来、読みこむことで文章をもっと近くに感じることが出来ます。同学年の友達に「ぶ厚い本を何冊も何回も読めてスゴイ！」とよく言われます。でも、私は、何回も読み返すことで文章にかくされた「ひみつ」や「なぞ」を解き明かしている様な気分になるのです。『ハリー・ポッター』は特に「ひみつ」がたくさんかくされているので何回も何回も読み返したくなります。例えば、ダンブルドア校長先生の意味の深い言葉や、ハリーの行動や言動、時々出てくる皮肉などです。『ハリー・ポッター』を私は二十回以上読み返しています。こんなに読み返すことの出来る本は私の人生の中で『ハリー・ポッター』しかありません。

『ハリー・ポッターと賢者の石』（J.K.ローリング、静山社、一九九九）

小学生の部
優秀賞

目標と努力の大切さ

海蔵小学校　六年
佐野　雫

私は四年生の頃、友達に目標がつくりたいと相談しました。友達はそれなら『願いがかなうふしぎな日記』という本を読んだらとおすすめしてくれました。

この本のお話は、光平が日記に望みを書くお話です。おばあちゃんからもらった日記に実現したい望みを書いて、その望みを実現させるために一生けん命に努力します。そして、いろんな人を喜ばせたり、おどろかせたりします。読んだ人に勇気をくれる本です。

とくに私の気分を上げてくれる場面があります。それは、光平が、転校してしまったなつきさんに花と帽子をわたすためにとなりの県まで一人で家を探してそこまでたどりついた場面です。その中で「もし」は言わないという約束を自分の中でしていました。そしておそれずになつきさんの家まで行き、花と帽子をわたすことに成功しました。

私はバドミントンをしています。五年生のときに全国大会の県の予選がありました。団体戦なのでチームワークが大切な試合でした。あと二点の差で敗れてしまい、みんな、とても悔しい思いをしました。そして家に着いたときにこの本をしょうかいされたことをふと思い出しました。私は、日記に「県で優勝した」と書きました。来年の県予選の試合までに、日記に書いたことを実現するために試合までの一年間をチームと努力しました。チームメイトの仲を深めたり、できるだけ練習を休まないようにしたりしました。自分たちだけの応えん歌をつくったりもしました。シャトルが床につく直前まで一生けん命にシャトルを追いかけて、あきらめないようにがんばりました。そしてむかえた全国大会県予選の当日。今まで練習したことを頭にえがきました。みんなで大きな声でそろえて応えん歌を歌い、シャトルを一生けん命追いかけて、最後まであきらめずに試合をしました。その結果ギリギリでしたが、今まで勝てなかった相手に勝つことができました。小学校最後のこのチームでする団体戦に勝つことができたのです。昨年は全員、悔しなみだでしたが今年はうれしなみだになりました。チームメイトの私たちだけでなく、保護者までみんな満面の笑みで泣いていました。今までにないほどの喜びが感じられました。

この経験から努力をすることで、成果が得られることを身を持って知りました。その途中は、苦しいこともあるけれど、それを乗りこえる強さが身についたと思います。

私がなぜこの本をくり返し読みたいかというと、私はさぼってしまうことが多くあるからです。そんな時にこの本を読むと努力をしようという気にさせてくれるのです。

私は、何事にも目標をつくることが大切だと思いました。目標なしですることが分からずに過ごすよりは、目標を持ってそれが実現できるようにした方が良いと思いました。目標を持ち、それに向かって努力することが大切なのだと思います。

『願いがかなうふしぎな日記』（本田有明、ＰＨＰ研究所、二〇一二）

小学生の部
優秀賞

私がぼくらにハマるわけ

常磐西小学校　五年
片野朱梨

私は、宗田理さんのぼくらシリーズが大好きだ。ぼくらシリーズは、中学生のぼくらが悪い大人にいたずらをしてやっつける話で、長年にわたり何巻もシリーズがある。いとこのお兄ちゃんや私のお兄ちゃんも、小学生の時に大好きだったらし

く、みんなからのおさがりの本も私の手元にある。私がぼくらシリーズを知ったきっかけも、そのいとこのお兄ちゃんや私のお兄ちゃんに勧められたからだ。読み始める前は、「ほんとにおもしろいの？」と疑い半分で読んでみたが、見るとびっくりとても面白くあっという間に読み終わってしまったのを今でも覚えている。もちろん私が新たに買った新作もあり、すっかりこの本のファンになってしまったのだ。

朝学校へ行くまでの時間に、学校の休み時間に、学校から帰ってきての休憩中に、などの時間があればついつい読んでしまう。熱中しすぎて周りの声が聞こえなく、親にしょっちゅう怒られてしまうほどだ。

ぼくらシリーズでは、現実世界ではできないことをぼくらたちがやってくれる。大人の意見に飲み込まれずに自分の意見を持ち、間違ったことを正していったり、大人に分からせていったりする。また、ぼくらたちは想定外のことばかりで、ドキドキわくわくさせてくれる。私は、ぼくらたちのような行動力や勇気は私にはないから、勇気を持って立ち向かうぼくらたちにはとてもエネルギーをもらっている。そしてぼくらたちと一緒に戦っているような気持ちになり、本を読み終わるころにはとてもスッキリした気分になるのだ。

私は小さいころから本が大好きで、図書館通いも日常生活の一部になっている。本は現実と違う世界に連れて行ってくれる楽しさがある。その本が楽しい、面白い、というのはもちろんあるけれど、現実の世界と違う世界を味わうことができ、その本の世界の一員に自分もなっている気分になれるところが本のいいところだと私は思っている。

新しい本を読むとき、続きはどうなるのだろう？と先が知りたくて一気に読んでしまう。でも、最後までストーリーを知ってしまっても何度もわくわくさせてくれるのがぼくらシリーズだ。でも、ぼくらシリーズには違う役割もあると思う。学校でいやなことがあった時や、もやもやした時にも私の心をリセットしてくれるのだ。面白くないことがあった時などにはいやな気分を全部とは言わないけれど、だいぶふきとばせてくれたり、忘れさせてくれたり楽しませてくれる。そんな時、いとこのお兄ちゃんや私のお兄ちゃんもそうやって思ってきたのかな？と少し思ったりする。

ぼくらシリーズは、小学生にとても人気があり、学校の図書室でもなかなか借りたい本が借りられない時がある。面白いだけでなく、もしかしたら私のようにみんなのいやな気持ちもそうやってふきとばしているのかな？というふうに思っている。

『ぼくらの七日間戦争』（宗田理、KADOKAWA、二〇〇九）

中学生の部
最優秀賞

二人の声
～ガブとメイがくれたもの～

西陵中学校　二年
辻　侑　玖

気づいたら涙が静かに頬を伝っていた。『あらしのよるに』のシリーズを読んだ時のことである。自分でも驚いた。この本との出会いは私の人生を語る上で欠かせない、かけがえのないものとなった。

私は小さいころから本が好きで、様々な本を読み聞かせてもらっていた。その中でも特に好きだったのが『あらしのよるに』というオオカミのガブとヤギのメイの二人（二匹というべきかもしれないがあえて二人とする）の物語だった。その当時はこの本に続きがあることなど知らず、嵐の中の小屋で互いの正体を知らずに話している二人の姿にドキドキしていた。その感覚が大好きで、なんともいえない面白さを感じていた。

それから私も小学生になって図書室で様々な本に親しんでいた。その日もいつものように読みたい本を探していた。すると見覚えのある背表紙が目に飛び込んできた。近づいて見てみるとやはり『あらしのよるに』の続きだった。見つけた時の「続きが読める」という興奮は計り知れないものだった。今でも鮮明に覚えている。その世界に取り込まれるような感覚で、二人に感情移入していった。そして当時最終話だと思っていた第六巻『ふぶきのあした』の最後、ガブがいないことを知らずにメイがガブの名前を叫び続ける描写のところで切なさに胸が苦しくなり、涙があふれ出ていた。そんな風にこの本と私との物語は終わるかに思えた。

しかし数年後、またいつものように図書室で本を探していると『あらしのよるに』のシリーズと同じような絵なのに見覚えのない本を見つけた。と同時に手に取っていた。それは『ふぶきのあした』の続編『まんげつのよるに』だった。少し小さいサイズだったため今まで気づかなかったのだろう。そこには記憶を失ったガブの姿が描かれていた。ガブがメイを襲ってしまうのではないかと少し不安になったが、話の最後に二人で満月を眺める姿にはまた感極まるものがあった。

それからも私と『あらしのよるに』の物語は終わらなかった。今度の出会いは本屋であった。目的の本を手に本棚を見まわしていると視界に入った『あらしのよるに』の七文字。見るとそれは短編集だった。迷わず購入した。帰って読むのが待ちきれなかった。帰るや否や、早速表紙をめくって読み始めた。そこには二人の知られざる物語も描かれていた。今まで読んでいた本の裏側を知れることがうれしくてたまらなかった。読み終えたころには人生とはどういうものなのかを二人に教えてもらったような気持ちになっていた。

今この瞬間も頭の中にガブとメイの二人と過ごした時間が鮮やかに浮かび上がってくる。思えば、ずっと二人に呼ばれていたのかもしれない。私に感動を与え、生きることについて考えさせてくれた二人。そういえば最近二人に会っていなかった。今「久しぶりにおいでよ」という二人の声が聞こえた気がする。

『あらしのよるに』（木村裕一、講談社、一九九四）

中学生の部
優秀賞

バムとケロとわたし

暁中学校　二年
庄村　愛

「こんこんこん」母が読み聞かせをしながら絵本の表紙をノックする音が聞こえる。登場人物がドアをノックする音だ。私は小さい頃母がよく読んでくれる『バムとケロ』の本が大好きだった。いつもおだやかでしっかり者の「バム」と、食いしんぼうでマイペースな「ケロ」ちゃんがおくる日々の暮らしの物語だ。このシリーズには五つのストーリーがあり魅力に溢れている。

まず表紙の文字に魅力がある。『バムとケロのにちようび』ではドーナツが活躍するのでドーナツの生地のような文字、『バムとケロのそらのたび』では空を冒険するので雲のようなデザインの文字になっていて、表紙だけでも楽しい。ひとたび本をめくれば、小さい子もワクワクするような工夫があちこちにほどこされている。私が気に入っている三つについて述べたい。

一つ目は擬音語の面白さだ。『バムとケロのもりのこや』の冒頭に「ぽかぽか　あたたかい　もくようび」とある。「ぽかぽか」をつけることで暖かさが伝わってくる。『バムとケロのにちようび』の物語でドーナツを作る場面では「こね　こね　こねて　ぽこん　ぽこん　かたを　ぬいて」とある。これも「こね　こね」や「ぽこん　ぽこん」とリズム感のいい擬音語があることで、読むのも楽しいし聞いているのも楽しくなる。

二つ目は手の込んだコマ割りの工夫だ。コマ割りは漫画に使われる技法で、絵を枠線で区切って場面の転換や時間の流れを読者に想起させる。『バムとケロ』シリーズの絵本では大きな一ページをコマ割りし文章を分割することで、登場人物の生き生きとした変化や面白さを生み出している。

三つ目は小さなサブキャラクターの活躍だ。いろいろなコマにこっそり犬やうさぎのサブキャラクターが動き回る様子が描かれている。この犬やうさぎ探しは小さい頃だけでなく今も夢中になってしまう可愛さと楽しさがある。

最後にこのシリーズの最大の面白さは読むたびに発見があることである。『バムとケロのもりのこや』の話の中で『バムとケロのおかいもの』の絵本が置いてあったり、『バムとケロのにちようび』でバムが見つけ出した『ふしぎな　ひこうきじいさん』の本を『バムとケロのそらのたび』でおじいちゃんに届けに行ったり、と読むたびにシリーズ間の秘密のつながりを見つけられる。さらに背景に描かれているサブストーリーも面白い。『バムとケロのおかいもの』のお昼ご飯を食べているシーンの後ろで、小さな犬「ヤメピ」がソフトクリームを落としそうになったねずみを助けてソフトクリームをもらったのに、落としてしまいしょぼんとするサブストーリーが描かれている。

そんな魅力がある『バムとケロ』シリーズを私は今でも時々読んで楽しんでいる。大人も子どもも楽しめる絵本の良さをこれからも見つけようと思う。

『バムとケロのにちようび』
（島田ゆか、文渓堂、一九九四）

中学生の部
優秀賞

日本一有名なベストセラーなのに日本一内容が知られていないエッセイ

暁中学校　二年
兒玉帆生

「退屈で退屈で仕方ないから、一日中すずりに向かって、心に浮かんだ取り留めのないことを何となく書いていると、なんだか不思議で、おかしな気分になってくる」この一文で私が何度も読み返す作品が何か分かった人は果たして何人いるのでしょうか。「つれづれなるまに、日くらし――」文の意味を知らないまま覚えてしまい、著者がどんな人物でどんな作品を書いたのかさえ気にも留めなかった人達が多くいると思います。

日本一有名なエッセイ本なのに内容を知る人は少ない本の題名はそう、『徒然草』です。

『徒然草』という題名のみ聞くと内容が難しい長編小説だとよく勘違いされることがあります。私も読む前は、政治や人間模様を気難しく書いてあるのだろう、と偏見を持っていました。しかし、実際は想像よりも遥かに面白いエッセイの本なのです。二百四十三個にわたって書かれた教訓や日々感じたこと、思い出などがこの作品の中にあります。それはまるでX（旧Twitter）の呟きに思える程、著者の兼好法師が考えたことがのんびりと素直に書き連ねていました。

例を挙げると「夏は暑過ぎて耐えられない」「出家はしておいた方が良い」「物をくれる気前の良い友達は持っておくべし」このような自分の意見やその日その時の思いを楽しくそしてストレートに書いた作品が『徒然草』です。これだけでも十分愉快な本ですが『徒然草』はこれだけでは終わりません。

「新しい友達と旧友と一緒に話している時、新しい友達が理解できる話をするべきである」当たり前の事。至極当然の事だけれど自分の心に響いたのはきっと私だけではないと思います。共通で好きな物があった時、一人だけ全く知らなかったら。一人だけスマホを持っていなかったら。よく経験する出来事だと思います。実際私も最近この出来事がありました。昔の自分だったらきっと新しい友達の気持ちなんてお構いなしに話をしていたと思います。だけど今なら――。

私は物を壊す、捨てることが苦手です。友達や自分が作ったもの、くれたものなら尚更。幼稚園のころに友達がくれたいたって普通の、自分の手より遥かに小さい石を定期券入れに入れ、今でも持ち歩いています。執着心が強いとよく言われますが、その石を捨てたらなぜか友達すらも忘れてしまいそうで怖いので残してしまいます。中高祭の中夜祭も、小学生時代の運動会も片付けをしている時、不意に泣きそうになってしまうぐらい怖いのです。

徒然草は無常観、言わば永遠はないということを様々な視点で語るエッセイです。私とはまるで正反対な考え方です。この本を読んで自分の感性や思考が、がらりと変わった訳ではありません。物事が変わってしまうのが苦手な私にとってきっと生涯、無常観という考えになることはないと思います。でも、思うのです。家族も友達も、微かに変わっていってしまうなら私自身も変化しなければ、と。

『徒然草』（吉田兼好、岩波書店、一九八五）

中学生の部 優秀賞

技術者の執念

山手中学校　一年
山口　謙

この本を見つけたのはよっかいち電子図書館で面白そうな本を探していた時のことでした。僕は読書が好きなので、電子図書館が利用できるようになってすぐ、登録を済ませていました。そして、どの本を読もうかと一覧を見ていた時、この本を見つけたのです。この本にはある一頭のイルカが登場します。僕はこのイルカのために多くの人々が努力をしている姿に感動したのでこの本について書きたいと思いました。

この本は、沖縄美ら海水族館にいたイルカ、フジのお話です。フジはある日から、魚を嫌がるようになりました。検査のためにプールの水を抜くと、尾びれの先が壊死していました。普通は、傷から雑菌が入ることで壊死が起こるので、傷を治せば壊死は止まります。しかし、フジの尾びれには傷はありませんでした。原因が分からず、治療方法を模索し続けます。発病して三週間後、壊死している部分を切除することにしました。そして、無事に切除を終え、壊死の進行を止めることができました。しかし、発病から三週間が経ち、壊死している範囲が拡大していたことや、壊死している部分を確実に取り除くために大きく切除したために、フジの尾びれは四分の一程の大きさになってしまいました。うちわ程の大きさしかない尾びれではとうてい泳ぐこともできず、フジは毎日浮き続けていました。悪いことに、泳げないと運動不足でどんどん太ってしまいます。このままだと、別の病気で命を落としてしまいます。そこで、ブリヂストンという会社に人工尾びれを作ってもらうことにしました。しかし、開発は苦難の連続でした。人工尾びれの内側の形と外側の形、装着方法、ゴムの硬さ、イルカの泳ぎに耐えられる強度などの課題を試作とテストを何度も繰り返してフジが泳げるようになるまでスタッフの方々が力を尽くします。

この本の見どころは、試行錯誤しながら何度も試作とテストを繰り返して理想の人工尾びれに近づけていくところです。特に、ジャンプに耐えられる尾びれを作る場面では、硬さの調整に頭を悩ませていましたが、たくさんの試作品を作っては試し、と試行錯誤を重ねてジャンプに耐えられるものを作り出していました。

僕はこの本を読んで、ブリヂストンの人たちの頑張りがすごいと思いました。世界初の試みで、参考になるものさえなかったけれど、そこからジャンプにも耐えられる尾びれを作り出せる技術と情熱がすごいと思いました。また、何度となく失敗しても、めげることなく、いいものを作るまで試行錯誤を繰り返す、絶対にいいものを作るという執念がすごいと思いました。僕にはまだそこまで執念を燃やすものがありません。でもいつか彼らのように情熱を注げるものに出会えると信じて、日々を丁寧に生きていこうと思います。この本を何度も読み返し、心の灯をともし続けたいです。

『しっぽをなくしたイルカ』（岩貞るみこ、講談社、二〇〇七）

一般成人の部 最優秀賞

父母の声のような本と出会って

園田信子

図書館でふと出会った稲毛幸子著『１９４５わたしの満洲脱出記』は、私にとって大切な一冊になりました。日本がまだ恵まれていた頃渡満し終戦で引き揚げる間のことを書いた本です。読んでいるとまるで両親の声が聞こえて来るよう。返却後すぐに買い求め何度も何度も読み返しています。

私は一九四五年満洲で生まれました。父はシベリアに抑留され、残った祖父母と母、四才上の兄と私が、敗戦後正しく本に書かれているような満洲脱出をした訳です。皆亡くなってしまい当時のことを話してくれる人は居ませんが、読んでいると「あっ」と思い出すことがあちこちにあるのです。

母は作者より二才上でほぼ同じような経験をしたのでしょうが、もしこの本に出会っても辛くて読めないでしょう。例えば兄が亡くなった時のこと、私も子供を持つ身で想像しても悲しいことです。昔、あまり綺麗でない荷造り紐のような物が、お供え皿に載っていて、何かと聞いたことがありました。引き揚げ中に亡くなった兄を、新京の駅前の大きな木の傍に埋め、そ

の場所を紐で計り大切に持ち帰ったそうです。いつか再び骨を拾うつもりだったのでしょう。稲毛さんも亡くされた二人のお子さんを埋葬後掘り出し、火葬にしてお骨に出来て四人で日本に帰れると安心される場面がありました。

又、ロシア兵を恐れて若い女性は顔に泥や墨を塗ったりしたこと。母も経験したそうです。稲毛さんは、味噌を塗ったとありました。

いよいよ引き揚げ船に乗ってからの過酷さも祖父母が話してくれた通り。沢山の人が死ぬ度海に捨てられたと。何百人もの子供がいた筈なのに、日本に着いた時はたった五人。乳飲児は私ひとりだったそうだ。祖母は私を抱いては船員さんの傍へ行きお尻を抓って泣かせたそうだ。すると船員さんがおにぎりをくれて、それを母に食べさせお乳が出るようになったとか。兄を亡くした後どうしても私を死なせてはならぬと言う祖母の強い気持があったとよく話してくれた。本を読むと私には言えなかったような話も沢山ある。大人達はさぞかし辛い時代だったろう。

我が家は幸いにも兄以外は日本に帰ることが出来、二年後には父も復員した。その後弟も生まれた。

昭和の終り頃だったか、政府から引き揚げ者や亡くなった人への見舞金が出ると新聞に載っていた。父に電話して私が代りに申請すると言ったら「無事に生きて帰っただけで十分」だと断られた。

あの辛い経験を少しばかりのお金に換えたくないと父は言うのだ。

そんな父の気持は年を取ると共に解かり、そしてこの本に出会ってから尚、よくよく解かるようになったのでした。

赤ん坊の私は知らなかった出来事を忘れないためにずっと読みたい本です。

『1945わたしの満洲脱出記』（稲毛幸子、ハート出版、二〇一二）

一般成人の部
優秀賞

読書の前には筋トレを

浅野 ひとみ

私は常にお尻が痛い。というか、痔が痛い。読書が好きだという人の中には、この痛みを分かってくれる人が一定数いるのではないかと思っている。いや、きっといると信じている。

昔から私はトイレという空間が好きだった。決して誰にも邪魔をされず、窓やドアの向こう側から聞こえてくる音や声は日替わりのBGMとなり、なぜか保たれている適度な室温。

そう、読書に最適な空間だったのである。

ただ昔の実家は汲み取り式便所（通称ボットン便所）だったため、本を読んでいると足が痺れてしまい、トイレから出ようと便器をまたぐ際にスリッパが何足か犠牲になった。そんな日々を過ごして足に読書用とも言える筋肉がついた頃、家の建て替えと伴に洋式便所がやってきた。言わずと知れた、座ることが出来る便器だ。これで読書のための環境が更に整ったわけである。

ところが、滞在時間の長期化に伴いBGMの一部だった母の声は私をトイレから出す為の声掛けになってしまった。さらに私は痔主になってしまった。トイレに行ったついでの読書なのだからもちろんお尻は出ているわけで、その状態で長時間の座位。これがお尻に良いわけがない。

姿勢が悪かったのだろうか。もしも腹筋を鍛えていたら姿勢正しく座ることが出来ていたかもしれないし、そうすればお尻への負担も軽く済んで痔も出来なかったかもしれない。という事は、私が読書の前にやるべき事は筋トレだったのか。正しい姿勢で座っていれば体幹も鍛えられて、健康な身体で読書が出来ていたかもしれない。汲み取り式便所で鍛えられた足の筋肉は役に立たなかった。

閑話休題。

あれから長い時を経て、今の私は鍵のかかったトイレに声をかける側の日々を送っている。

「早く出なさい。いつまで読んでいるの」

そう、私の息子もまたトイレ読書に魅了された一人なのである。遺伝子よ。あぁ遺伝子よ。

そんな息子を始め、過去の私、そしてトイレ読書に魅了されている人たちへKADOKAWAから出版されている『トイレで読む、トイレのためのトイレ小説』という本をオススメしたい。小便用に一分程度、大便用に五分程度で読むことが出来る、トイレにまつわる短編集が収められている素晴らしい本だ。そしてこの本、トイレのみならず小学生の朝読書の時間や家族読書、ふとした空き時間に読むのにちょうど良い長さでもあるのだ。笑える話、ドキドキする話、不思議な話、たまに怖い話。色々な種類の話があり飽きることなく読むことができる。

これでまた皆のトイレ読書がはかどる事だろう。ただ、お尻も大切にしてほしい。

『トイレで読む、トイレのためのトイレ小説』（雹月あさみ、KADOKAWA、二〇一九）

一般成人の部
優秀賞

先生と生徒

暁高等学校　一年
小林 道俊

今から六年前の日曜日。いつもの様に私は、近所の祖父の家に遊びに行った。祖父は社会科の教師をやっていたこともあり、とても教養があって事あるごとに私に、自分の体験談を面白おかしく話す好々爺であった。その日は、祖父が読書の大

切さを私に対して熱心に語っていた。当時の私は、読書が大嫌いで小学校の宿題で出された読書感想文を書くとき以外は、進んで本は読まなかった。そのため私は、祖父の話を苦い顔をしながら聞いていた。

そんな私を見て、祖父は私の人生を大きく変えたある一冊の本を本棚から取り出した。その本は司馬遼太郎の『関ヶ原』という本だ。私がその本を見て「これはどんな本？」と尋ねると祖父は「関ヶ原の戦いをテーマに書かれた本だ。」と返した。その返答を聞いた私はさらに顔を苦くした。私は歴史が大の苦手であり、本も渡そうとする祖父を拒もうとしたが、大好きな祖父の面目を潰すのは良くないと思い、ついに本を受けとった。

その日の夜、祖父からもらった本を読もうとしたが、三分も経たないうちに漫画を読み始めた。難しい漢字や戦国時代をテーマにした本なので、物事の表現や登場人物の言葉遣いが分からずとても読みづらいと思った。ただこれでこの本を祖父に返す口実ができたと私は喜んだ。そして次の日曜日、私は祖父の家に行き『関ヶ原』を祖父に返した。私は祖父に「漢字や単語が難しくて読めない。」と言った。祖父はなぜか笑顔で私を家に招き入れた。後に私はあの時なぜ笑っていたかを聞いてみると祖父は「お前に本と歴史を好きになってもらおうと思ったからだ。」と返した。

余談はさておき、祖父は椅子に腰掛け私に「ならわしが読んでやろう。」と言い読み聞かせを始めた。祖父は、通った声で読み本に出てくる登場人物に合わせ、時には荒々しく、時には凛とした声で読み、まるでこの場にいるような高揚感を感じながら祖父の語りを聞いた。その日の帰り、読書の楽しさや歴史の面白さを初めて実感した。

それから私は、小学校の帰りに祖父の家に足繁く通い、話の続きを聞いた。分からない人物や単語の意味を聞くと祖父は嬉しそうに教えてくれた。思えばこの読み聞かせの時間は、祖父と孫という関係ではなく、先生と生徒という関係になっていたと思う。

あれから六年。私は高校生になった。四年生の春に始まった読み聞かせは冬頃に終わり今度は、自分の力だけで読もうと思い自分の足で本屋に行き、自分のお小遣いで『関ヶ原』を買った日のことを今でも鮮明に覚えている。この本を読んで祖父の様な教師になりたいと思った。夢を追う中で、辛い時や苦しい時が出てくるだろう。その時は『関ヶ原』をまた読もうと思う。きっと本と祖父が私を後押ししてくれるだろう。

『関ヶ原』（司馬遼太郎、新潮社、一九九二）

一般成人の部
優秀賞

今感じること

上田　利栄子

小さなジャズ喫茶の扉を開けると、友人が笑顔で迎えてくれた。ピアノの弾き語りライブをする彼女は、パンツスーツで素敵だ。家族も観に来ているのかなと思い尋ねた。

「今日、家族は？」

「来てないよ。」

「家族に見られるって、恥ずかしいものね」

すぐに、まずいことを言ったなと後悔した。私は家で歌っていると「え？今なんて言った？」と話しているのと聞き間違えられるくらい音痴なので、恥ずかしいという言葉が出たが、そんなわけがない。ライブが始まると、二十人ほどのお客さんを前に彼女は堂々と歌った。彼女だけにしかない恰好良さがあった。その姿を見ながら、先日、九年振りに読み返した『火花』のことが浮かび、彼女は自分の人生を歩んでいる人だなあと思った。

『火花』は若い漫才師たちが売れようともがく姿を描いている。主人公は、売れる保証などない漫才の世界に挑戦し、結局夢をかなえることはできないのだが、後悔しないのだった。以前に読んだ時は気にならなかったが、自分が年齢を重ね、人生の後半戦に突入しているからだろうか。主人公の言葉が自分に向けられているように聞こえた。

「一度しかない人生において、結果が全く出ないかもしれないことに挑戦するのは怖いだろう」「長い月日をかけた無謀な挑戦によって、僕は自分の人生を得たのだと思う」

自分の人生を振り返った。大学卒業後、何十社も受けてようやく就職したことで、頑張ったつもりでいた。しかし、それは人生に失敗しない道を優先しただけだったのではないかと今更ながら思う。本当は英語を使った仕事をしたいとか、脚本家になりたいと思ったが、どうせ無理だろうと挑戦すらしなかった。その後も何かに挑戦することはせず、漫然と暮らしてきた。だから、何かに挑戦した人が得る「自分の人生」というものが無いような気がした。

ライブで歌っている彼女にはそれがあるように見える。彼女は大学時代、就職も決まっていたが、それをけって弾き語りのバイトを選んだそうだ。歌いたいと思った彼女はその道を選び、今の道へとつながっている。

もう一度『火花』を開いた。小説の中では二十代の若者が言った言葉だが、自分への励ましとして読み返した。「生きている限り、バッドエンドはない。僕達はまだ途中だ。これから続きをやるのだ」何歳だって、まだ途中だ。英語の勉強もまた始めよう。脚本ではないが、文章を書くことをもっと真剣にやろう。時々エッセイを書いているが、昔ほどは書いておらず、コンクールに応募することも年に一、二回だ。英語も文章も上手くなることをどこか諦め、頑張ることが無駄にならないように過ごしていた。頑張って挑戦しても結果は何も出ないかもしれないが、挑戦した自分の人生を得ることはできるだろう。数年後『火花』を読む時は、どう感じるか楽しみだ。

『火花』（又吉直樹、文藝春秋、二〇一五）

審査講評

「読み」「書く」ことの意味

国府正昭

この「読書に関するエッセー」コンクールも実に40回を迎えた。世に〝読書離れ〟が言われ始めて久しい中、これだけの年数続いているのは、歴代の担当の尽力や前任の選者の適切な選考があったのはもちろんであるが、何より本を読むことに親しみ、自分の思いを書き記そうとする意思が市民の中にまだまだ存在していることの証左と、心強く思うところがある。メールでの作品の受付とか電子書籍の貸出とか、時代の変化への対応は果たしつつ、「読み」「書く」ことを大切にするこんな取り組みが今後も継続され、より発展すればと切に思う次第である。

こんなことを書いたのも、ある作品に接し読み書くことの大切さを再認識したからである。一般成人の部の園田信子さん。作者は終戦の年に満洲で生まれ、祖父母や母、兄と共に引き揚げてくるが途中で兄は亡くなってしまう。母たちの心には刻み込まれているが赤ん坊の作者は記憶しているはずもないその体験を、やはり引き揚げを体験した女性の一冊の本を読むことで追体験していく。まさに読み書くことの効能を如実に表したエッセーと感じたが、さらに言えば、この時代にはこんな体験をした人が確かにいたのだと書き記すことは、個人の記録の域を超えて人々共通の財産とすべき事柄だとすら思った。この作を迷わずに最優秀とした理由である。他にも、浅野ひとみさんの作にはユーモラスに話を進める〝軽み〟があり、それは構えて書きがちな応募作の中でとりわけ魅力的だった。小林道俊さんは「読書が大嫌い」と書く素直さと、司馬遼太郎の作品を読み聞かせしてくれたおじいさんにこそ拍手をしたい。上田利栄子さんは、友人が歌う姿や『火花』を再読することで〝挑戦〟する姿勢を取り戻していくのだが、その心の動きがよく描かれていた。

中学生の部では、辻侑玖さんの作を最優秀としたが、幼い頃に出会った本の続きを小学校の図書室で見つけ、さらにその後、続編や短編集とも出会っていくという展開が素晴らしく引き込まれる。「涙が頬を伝って」「感極まる」などの表現を使いこなしている点にも感心した。庄村愛さんの作は書き出しのホンワカした雰囲気が魅力的だし、本の魅力を文字や擬音語、コマ割りと分析的に見る着眼点がおもしろかった。兒玉帆生さんのエッセーは中学生にはやや難解な『徒然草』を取り上げているが、その根幹をちゃんとつかんでいるし、それを自分の姿勢と引き比べているところが素晴らしいと思った。山口謙さんは電子図書館を早速に利用してくれた。病気で尾びれが壊死したイルカのために人工の尾びれを作る話に引き込まれ、技術者の努力に感動している様がありありと伝わってくる素直な作だと感じた。

小学生の部では、谷口楓真さんの作を最優秀としたが、小学校二年生の彼が繰り返し読んでいる本が『三省堂例解小学国語辞典』と知って大いに驚いた。でも、パラパラめくって気になったところから読んでいるというだけあって、「にちじょう」とか「一石二鳥」といった言葉をちゃんと作中で使えている。谷口君にはこれからも楽しみながら言葉をたくさん覚えていってほしい。中村椎南さんはハリー・ポッターの本を全巻自分で買いグッズも集めているとか。その本を「二十回以上読み返し」たくさんのことを学んだという中村さんの熱中ぶりが眩しい。佐野雫さんの作は、本の中の物語と実生活での経験を結びつける視点で捉えているところに、既に過去に二度入選してきた彼女の成長を感じた。片野朱梨さんの作からは、あるシリーズへの熱中ぶりがありありと伝わってくる。読書を本当に楽しんでいるのがよく分かり、こちらも笑顔になる思いだった。

人生の相棒となる本

高田晴美

今回のテーマは「何度だって読みたい本！」。何度でも読むからには、単に面白いというだけではない何かがあるはず。それがよく語られている作品を受賞作品として選んだ。

小学生の部最優秀賞は谷口楓真さん。小学2年生でこれはスゴイ。毎日読むのに読んでいないページがたくさんある本として国語辞典を挙げているのがユニークだし、紙の辞書であることを楽しみまくって言葉を自分のものにしているところが頼もしい。中村椎南さんはシリーズ物にはまっているだけでなく「本読みルール」という読書論にもつなげており、小学生ながらに本読みの巧者。佐野雫さんは、願いが叶う不思議な日記についての小説に触発されて、自分もまだ叶っていないことをあえて日記に書き記し、それを実現させる努力を自分から引き出すという、ある意味生き方を変えた本についてであった。片野朱梨さんもはまりまくったシリーズ物について。読書好きはお気に入りのシリーズ物を求め、自分の中に日常とは別の世界を打ち立てるというのが伝わってきた。

中学生の部最優秀賞は辻侑玖さん。人生で何度も出会ってしまう縁で繋がれた本も、年を重ねてきた人間にはあるだろうが、それが中学生の辻さんの人生にもあるという縁を感じさせる読ませる文章。庄村愛さんは、大好きな本の面白さを具体的に分析。論理的な分析力と、その本を愛おしく思う熱情がうまく融合している。兒玉帆生さんは『徒然草』について。『徒然草』の世界観とは正反対な、無常観に耐えられない性格なのに、面白がっている様子が愉快。山口謙さんの、ノンフィクションの技術者の執念に感銘を受けたという文章は説明が上手。「この本を何度も読み返し、心の灯をともし続けたい」という締め方が印象的だった。

一般の部最優秀賞は文句なしで園田信子さん。圧倒された。家族の、人間の、簡単に分かった気になってはいけない人生を思わせられた。取り上げられた本そのものよりもそれを語る園田さんの話として、いい意味で引きずる感があった。浅野ひとみさんは、今年のエッセイ〈軽み〉部門第1位！「私は常にお尻が痛い。というか、痔が痛い」から始まる読書エッセイが存在するとは。エッセイにはこういう洒脱も良いものだ。息子さんともどもお尻を大切に。高校生の小林道俊さんは、小学生の頃に司馬遼太郎を読み聞かせてくれたお祖父様を「先生」、自分を「生徒」とする読書体験が、自分に教師になるという目標を与えてくれたとのこと。読書体験は、本そのものだけでなくどういう状況だったのかも大きく影響することを思わされた。上田利栄子さんは、「人生の後半戦に突入」しているからこそ自分の人生を振り返るという大人ならではのエッセイ。若者が夢を追いかける物語に、活躍する友人の姿に、「自分の人生を得る」ことを志そうとする姿には、こちらも励まされた。総じて一般の部は、長い年月を見通した読み応えのあるエッセイが多かった。

読書に関するエッセー
入賞作品集　二〇二四
令和六年十二月発行
発行　四日市市教育委員会
編集　四日市市立図書館